

## 熊本地震

## 災害支援ナース派遣レポート

病棟看護科 田熊<sup>たくま</sup>敦子<sup>あつこ</sup>

平成28年熊本地震で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

日本看護協会では、4月17日から6月14日まで、延べ1,961人の災害支援ナースを熊本県内32か所の避難所に派遣しました。

災害支援ナースとは、災害発生時に被災地に派遣され、現地で働く看護師を支援し、負担の軽減を図りながら、適切な医療・看護を提供することで被災者の健康維持の役割を担う看護職のことです。

今回、私は5月29日から6月1日までの4日間、被害の大きかった益城町で活動を行いました。

朝、羽田空港に集合し、午前10時過ぎのフライトで熊本空港に昼頃到着し、その後直ちに益城町の特別養護老人ホームに開設された福祉避難所に向かいました。

発災から既に1か月半が経過していましたが、避難所までの移動中車窓から被害の甚大さを目の当たりにすることになりました。沿道の家屋の2軒に1軒は屋根がブルーシートで覆われています。総合体育館の駐車場は避難者の車で埋め尽くされています。山崩れや建物の倒壊などで道路が各地で寸断されているらしく、何度も何度も迂回を繰り返しながら、ようやく福祉避難所にたどり着きました。

福祉避難所とは、高齢者や障害者など特に配慮が必要な方々のための避難所です。

到着後、まず保健師や臨床心理士など既に活動しているスタッフから避難者についての情報を収集し、その後実際に避難者の方々とコミュニケーションを行い、体調や住環境、支援者の有無などの状況を把握しました。

そして、その日の夕食からは、食事の準備やセットのほか、食後は避難者の方々の薬の服用チェックをしながら、合間には血圧の測定や怪我をされた方の傷の処置、感染症を予防するための衛生管理などにも当たりました。

また、布団干し、トイレや床の清掃、支援物資の整理などの作業を避難者といっしょに行ったり、入浴の介助や洗濯の方法などの指導も行いました。

さらには、災害支援ナースの派遣が間もなく終了する時期であったことから、福祉避難所を運営する特別養護老人ホームの施設長や熊本県、益城町役場の職員を中心に、保健師や介護福祉士、栄養士など多職種が参加するミーティングを行い、避難者の体調管理や通院方法など今後の生活のための情報共有を図りました。

今回の派遣を通じて「安全第一」を痛感しました。震度7の揺れに2度も襲われれば、多くの建物が被害を免れません。まずは身の安全を確保することです。次に大切なのは普段からの備えです。災害支援ナースの研修では「備えあれば憂いなしとはいかないまでも、被害は少なく済む」と教えられます。避難訓練はもちろんのこと、例えば家族でキャンプなどを体験しておくこともいざというときに役に立ちます。

そして希望を失わないことです。数日間は厳しい状況に耐えなければなりません。1か月、2か月という時間の経過とともに状況は必ず改善します。

益城町は、川のほとりに竹林が広がり、夏の夜を蛍が彩る美しい町です。

一日も早い復興を願わずにはられません。

